



【書評】日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ』光
村図書出版刊 A5判 三五八ページ 定価一八〇〇円(税
別)

酒井 董美 ただよし

各雑誌や新聞に掲載されたエッセイから選ばれた77名の作品が本書に集められている。そしてこの本には普通あるはずの「序文」も「後書き」もなく、「目次」の次のページから、直ちに作品が始まっている。

本書の性格を知るため発行母体を説明しておく。編者の日本文藝家協会は、大正15年に発足した公益社団法人であり、文芸を職業とする者の職能団体として設立された。初代会長は菊池寛氏。現在の理事長は直木賞作家の林真理子氏であり、事務局は文藝春秋ビル内に置かれている。

編集委員としては、林真理子理事長の他、角田光代(直木賞受賞者以下同記)、藤沢周(芥川賞)、町田康(芥川賞)各氏である。錚錚たるメンバーによって選ばれたエッセイ集が本書ということになる。採用された全国各地からの作者は、やはり作家が圧倒的に多い。小説家はもちろん、歌人、作詞家、評論家、翻訳家など並んでいるが、大学教授なども散見される。

取り上げられた作品の題材は多彩を極めており、人々の交遊の中から得た珠玉の思い出を、各人が綴っている。筆者の知っている著名人としては、黒井千次、瀬戸内寂聴、俵万智あたりであり、直木賞とか芥川賞受賞作家も編集委員になつてはいるが、平素、文学に関心を持たない筆者なので、初耳の方が多い。日頃の勉強不足を反省するばかりである。

ところで、作品の中に島根県関係者としてただ一人、一畑教師管長・飯塚大幸師の「気づく」が収められているのは嬉しかった。これは『すばる』令和元年6月号掲載から採られたものである。内容は飯塚師が中学生時代、京都の臨濟宗妙心寺派の大珠院で修行していたおり、師匠の盛永宗興老師(1925~95年)との何げないやりとりから会得された、人生の奥義についての経験談を述べたものであり、ほのぼのとした味わいがある。他のどなたの作品と比べても一歩も引けを取らない、気品あふれる内容であった。

飯塚大幸師は、現在、任意団体である島根半島四十二浦巡り再発見研究会の会長であり、筆者も時々会の役員会などで一緒にいるが、常に大局的な立場で発言され、なるほどそのように結論すべきだと納得させられることも多いのは、このような若いときの体験から来ているのか、と密かに頷いているところである。

この『ベスト・エッセイ』に盛られたそれぞれの作品は、個性豊かなわが国トップクラスの書き手の、人生を彩った体験にあふれ、読む時間を忘れさせる魅力に満ちている。